

# 愛の現象学的心理学

山 根 一 郎

Phenomenological Psychology of love.

Ichiro YAMANE

## 1. 個別感情を論じることの意味

感情心理学においても、感情（情感性）の現象学においても（演繹源となる本質に達したと自負しているためか）、帰納法的に個別感情を論じていくという愚直で非効率な方法は好まれていない。しかしそれらが個別感情を論じると途端に記述が通俗的になってしまう場面に接すると、個別感情を地道に理解することの重要性をかえって確信させる。さらに一般の心理学において、「～感」と名のつくひじょうに細分化された感情（ないし感覚）概念が術語として濫造されているのを目にすると、非術語段階のまま放置されている基礎的感情の学的把握こそ、先行すべきではないかと思えてくる（なぜなら、それら術語化された感情は、基礎的感情によって説明されるから）。

学問とは、あらゆる通俗的既知性に距離をもち、その根拠を疑うことから始めるべきものである。ただし感情の通俗知からの脱却は確かに容易ではない。感情はわれわれの（個人的、歴史的）生活の中で早くから既知のものとして与えられており、そのまま問題なく生活してきた。たとえ学問的立場になろうと、通俗世界で通用している感情了解を今さら疑う必要性を感じないし、疑うにしてもどのように疑えばよいのか、その疑い方すら判然としない。

実際、本稿でも、愛という基本的な感情について、それが論者に既知のものとして与えられたままを述べざるをえず、また他の感情との区別が直観的にできることを前提とせざるをえない。その所与性や前提の根拠などを素通りし、通俗的な了解から出発してしまうことは、本稿に「愛の現象学」と題する資格を失わせる。

それでもせめて「現象学的」と名乗るのは、本稿では、通俗的に「愛」と同定している感情体験を虚心に眺め直して、その体験の構成要素や意味作用などから論理的にその本質を探求することを試みるためである。この作業自体は、研究者が研究対象を頭の中で絞り込んでいく作業に対応している。その非公式的な思惟作業だけを論文にすることは、従来は明示されなかった研究者自身の思考過程を、現象学的にやり直し、研究過程の省略できない一部として公開すべきことを意図している。それによって、個別感情の通俗的了解をそのまま無批判に研究上で操作的定義に用いるような態度を避けたいのである。

## 2. 既存の言説から

愛という感情を再検討するにあたって、まずは既存の言説を参考にすることがあろう。ただ

しここで扱う愛は、日常的感情としての愛であり、宗教的に理想化されたものや逆に精神病理的に特殊化されたものは除く。また、ここでは愛についての古今東西の膨大な言説を概観し比較することが目的ではなく、本稿での論考につながりそうなものを簡単に紹介してみる。

まず、古代ギリシャのプラトンは『饗宴』において、愛（エロス）とは何かを主題としている（プラトン、1965）。その書には、悲劇作家アリストファネスの有名なアンドロギュノス（雌雄同体）の寓話が登場する。この寓話は、表面的には、分割された片割れへの“欠乏動機”としての愛を説明しながら、実は愛の対象は本来の自己（の片割れ）であり、自己の完全性への“達成動機”が根底となっていることが示されている。その点でこの寓話は、愛における“対象性”と“自己（同化）性”という相矛盾するベクトル成分、愛のアポリア性を内在させている。

『饗宴』における前哲学的段階でのエロスの意味づけ（書中でソクラテスが整理したアガトンの論点）に留まると、愛とは「何ものかに対するもの」、「所有しないものに対する憧憬・渴望」、「美しいもの対する」となり、異性愛を中心とした通俗的な愛の規定とみなせる（「美しいもの」は“魅力”という心理学の変数とみなせる）。とりわけ「何ものかに対する」という愛の対象性、すなわち“愛＝対象愛”という定式は、キリスト教的な絶対他（唯一神）を措定する思考によってさらに強化され、西洋的思考の伝統として前提視されてきた（H. コフートの出現まで）。

近代哲学の祖R. デカルトは『情念論』（Descartes, 1649）において、愛を6つの原始的情念の1つとし、「われわれにとって都合のよいものとして示される時、その物（対象）に対して『愛』をもつ」としている。このような（心理学でも使われる）条件発生論的説明は、愛という感情体験それ自体を素通りしていることに注意したい。

デカルトとは別の論理で感情を体系化したB. スピノザは『エチカ』（Spinoza, 1677）において、愛を「外部の原因の観念を持った喜び」と定義し、彼が基本感情とした「喜び」の下位感情としている。その「喜び」とは、「精神が一層小さい完全から一層大きい完全に移ること」という。

日本では哲学者の九鬼周造（“いき（粹）”という感情の現象学的構造の記述で有名で、その構造分析の手法を筆者も取り入れている）が、日本語（和歌での用法）を題材にして『情緒の系譜』として感情を体系化した（九鬼、1979）。そこでは、愛を「対象への志向性を主要内容とする情緒の1つ」とし、「対象が我々に嬉しさを起こさせるものであれば、その対象に愛を感じる」といい、西洋哲学の伝統に倣っている。

ただ九鬼は日本語の感情用語をさらに詳しく論じている点で参考になる。たとえば、愛に関係している「うれし」という情緒は、「うるはし」に由来し、それは「うら（心）」と「は（愛）し」による合成であるという。ちなみに愛の実現としての「嬉しい」には、九鬼はスピノザの「喜び」の定義を援用している。また「嬉しい」が受動性であるのに対し、「喜び」は能動性であり、その末梢形態が「楽しい」であるという。さらに九鬼は「親しい」を「愛の対象との交渉が、その時間的存在において、起始から出発してある濃度に達すると生じる内包的感情」としており、本稿で後述する心理的距離の接近現象と愛との連関性を指摘したことになる。

最近では、精神医学者の杉谷が、（本人は主張していないが）現象学的ともいえる愛の記述をしている（杉谷、1998）。すなわち「愛は世界受容（の緊張）であって、それは世界の中から比類なき価値を備えた対象を発見するが、（すでに比類なく価値ある）対象を変容させようとはせず、愛の対象をそのまま受け容れる」として、愛の世界受容性を他の感情である“欲

望”の世界分割性と対比させている。そして「対象の比類なさ」が愛の（通常の情動ではない）例外性であるという。そして「明確な対象をもつ」といい、「対象と非対称の境界がいたって鮮明」で、非対象に対して無関心であるという。「愛にとっては、対象が世界なのである」と伝統的な愛の対象性を強調し、「世界が対象大になる（縮小する）ことによって、愛の対象は『存在論的強度』を獲得する」と述べ、「愛はその存在性によって他の情動を凌駕する」「愛は存在そのものと出会う希有の機会である」と述べて、愛が表層的な心理現象にとどまらず、“存在論的”次元の問題であることを指摘している。この論点を本稿は受け継いでいきたい。

### 2.1. 「愛」という言葉への日常的抵抗感

愛について語る識者は絶えない一方で、われわれ日本人の日常の対人場面では「愛」という言葉は使いづらい。かような社会心理現象にも愛の意味探求のヒントがあるかもしれない。

たとえばアメリカでは（映画などを参考にすれば）、「I love you」というセリフは、恋人や夫婦だけでなく、親子の間や同性の友人にさえも使われる（パラ言語的に違いをつけている）。それに対し日本では「愛している」というセリフを日常的に使うには多くの人が抵抗感をもつ。おそらく夫婦においてすら使われにくいセリフであろう。それは日本人にとって「愛」という言葉に、明治以降のキリスト教の影響であろうか、宗教的に理想化された大仰さ・深刻さが含意されてしまっているためかもしれない。それゆえ、この言葉が日常の対人場面で使用された場合、かえって虚飾性すら感じられ、あるいは不気味なほどの深刻さによって、退かれてしまう（もともと仏教では、愛は「愛執・愛欲」という執着・煩惱をも含意していた）。

端的に言えば、「愛」は日常の感情表現用語ではないのである。ただしそれは日本人に愛の感情がないということではない。愛というヨソ行きの言葉に代わる、日常的な言葉がある。愛より幾分使いやすい表現に「愛情」があるが、さらに単なる一般的な「情、情け」が使われている。たとえば「情がわく」「情が移る」という表現は、ペットなど身近な小動物にも使われることもあり、日常的に抵抗なく使える。

「愛」の日常表現として「情」というまさに感情そのものを示す単語を使うその点が、愛の感情における重要な地位を暗示している。さらには「思う（想う）」という非感情用語も愛として使われている。この「思う」（懸想）という思念行為が愛という感情と関連しているという通俗的認識は、「思う」が愛の情熱度を弱めた提喻であるにしても、指摘しておく価値がある。

## 3. 愛の心理学

次に、心理学を中心とした感情・行動を研究する学問領域から、愛の発生的起源に関連する問題を抜き出してみる。

### 3.1. 愛の発生的起源

感情の発生的起源では、その系統発生的起源と個体発生的起源をそれぞれ問題にしたい。親鳥が自己の危険を省みず雛を守ろうとするような自己犠牲的・利他的行動を「愛」の系統発生的起源とするなら、その説明として、R. ドーキンス（Dawkins, 1989）が造語した「利己的遺伝子（selfish gene）」がキーワードとなる。ドーキンスによれば、生物にとっての真の“自己（主体）”は個体ではなく遺伝子である。したがって彼の論では自己複製とは個体ではなく遺伝子の複製を意味する。ドーキンスによれば、遺伝子は複製の成功確率を高めることを

行動システムである個体に命令している。遺伝子を時間・空間的に運んでいる個体の生存はこの複製の作業のための存在価値にすぎない。結局遺伝子には、個体としての親と子は複製されたコピーの世代差でしかなく（有性生殖の場合、コピー過程はやや複雑だが）、より新しいコピーの方が複製としての再生産の確率が幾分高いので、そちらの生存が優先される。彼の発想に従って、遺伝子だけに注目して進化の系統を生物発生時に遡れば、すべての生物は最初の遺伝子の複製仲間となり、種の差異すらも本質的な問題ではなくなる。それならば、ジャータカ（釈迦前世）物語にある捨身飼虎譚、すなわち飢えた虎の親子を救うために、自己の身体を捧げようとした釈迦の生物学的種を越えた自己犠牲な行為も、利己的遺伝子のふるまいに由来するものと解釈できる。

このような原理にもとづく母性愛的行動を引き起こす内的動因が、感情としての愛の起源といえるなら、愛はフロイト的なリビドーよりもさらに根源的な生命現象に由来した感情といえるのかもしれない。

愛の個体発生的起源については、（上とは逆方向の）鳥類や哺乳類の幼体が母親的成体に示す愛着（attachment）に帰することに異論はあるまい（Bowlby, 1969）。ただしポウルビィが実際に論じているのは観察者が認知した「愛着行動」であり、行動主体が内的に体験する感情としての愛ではない。この「愛着行動」は自身の生存にかかわる一方的な依存であり、自身への養育反応を引き起こさせる解発刺激を表出するだけでなく、この愛着行動そのものが親の養育反応を（少なくとも一定期間）持続させる。

愛着は自己の生存のための依存的愛であり、その本質は自己（利己的遺伝子）愛である。われわれ人間の愛も、この利己的な愛から出発するといえよう。

### 3.2. 自己愛

利己的な愛といえば自己愛（narcissism）が連想される。S.フロイトは、自体愛・自己愛から対象愛へとリビドーの方向が逆転することを愛の成熟とみなし、リビドーが自己に向ったまま対象化した自己愛を病的とみなした（Freud, 1914）。ここでの「対象」とは他者であり、（正常な）愛は対象愛であることが前提されている。しかし、フロイトに後続するH.コフートは自己愛を対象愛へ成熟する前の未熟段階の愛とはみなさず、独自の発達をとげるものとした。コフートはフロイトのような自己愛観を、「西洋社会の愛他主義的な価値尺度が不用意に侵入してきてことに起因」するものとし（Kohut, 1965; Ornstein, 1978に所収）、愛を対象愛に限定するプラトン以来の発想を相対化させた。

コフートの自己愛を構成する「誇大自己」（称賛）と「理想化された親イメージ」（理想）は、ともに「自己対象」（selfobject）という緊密な他者によって満たされるものという。すなわち彼の自己愛とは、緊密な他者からの称賛（自尊心）と緊密な他者への自我理想の投影同一化からなっており、自己が自己を対象とする鏡映的愛ではない。

コフート自身、自己愛理論から自己心理学へと発展するにつれ、自己対象とは「自己愛が備給された対象」（Ornstein, 1978）であるというように、自己愛と対象愛の中間としての、愛着の延長ともいえる「自己対象愛」（自己愛という対象関係）を問題にしていく（和田, 1999）。その和田も指摘しているように、われわれ日本人が通常体験しているのはこの自己対象愛に近い。われわれ日本人が「愛」を言葉にすることがはばかれるのは、われわれの感じている愛がいわゆる西洋的な対象愛ではないとこというすうすう気づいているためかもしれない。

そのようなコフートにとって（自己対象愛でない）真の対象愛とは、自己愛が方向転換した

ものではなく、「かつて抑圧されていた対象リビドーの解放」(Kohut, 1971) したものであるという。もっとも自己愛と接点のない対象愛は、自己にとって重要な意味をもちえず、意味のある対象愛は理想化備給と結合することが必要となる (Kohut, 1971)。

コフォート以降、われわれは愛＝対象愛とする発想を相対化できるようになった。ただコフォートにおいても、愛という感情現象そのものに対しては、リビドー備給、あるいは性的欲動の表現・昇華 (Kohut, 1984) というフロイト的規定のままである。

#### 4. 感情構造からみた愛

ある感情(概念)の意味を明確にするには、他の感情との差異に着目するのが有効である。ここでは九鬼と同じく、自国語における感情語分節にもとづいて愛という感情の意味を探ってみる。しかしその作業は、それぞれ比較する感情が互いに充分既知であるという前提(了解済みであるが説明はできていないという状態)に立つパラドキシカルな作業でもある。ただ、あいまいな了解状態の感情同士をあえて対比することで、それらの境界線が明確化されることは期待できる。また対立概念などを使用することで、比較する感情の属性値を論理的に推論することができる。

愛は現前している事象に対するその場での評価感情ではなく、事象の主体(必ずしも人格ではない)に対する感情であるため、その非現前化とともに消滅する表層感情ではない。対象が現前していなくても前意識レベルで持続しており、それゆえ任意な時、たとえば知的活動中にも表象可能であるため、驚きのような瞬間的表層感情よりは、はるかに知的把握がしやすい。

##### 4.1. 類似感情・下位感情

類似感情とは、当該の感情と本質的部分は異なるものの、共通部分が多分にある感情で、実際に移行可能である(双方向か一方方向かは個々の感情関係による)。それゆえ、分類基準によっては同一視あるいは階層化されることがあり、また当事者にも混同されることがある。下位感情は、本質は共通しているが、相違部分もある感情で、バリエーション(変異形)あるいは附属的感情をいう。

###### a) 好き

好きという感情(=好意)は、体験的に明晰であるにもかかわらず、実は愛以上に説明困難な感情である。それゆえ比較すること自体が困難であるが、対比することで境界を明確にした。

“好きな色、好きな食べ物“というように、好きとは対象への肯定的評価を意味している。好きが充足されている状態は、ワクワク感や嬉しさのような快適な興奮を伴う。これらの嬉しさ・喜び・幸福感などのノエシス的感情を伴う点で愛と共通している。

では両感情の相違点は何か。好きと愛の違いが最も先鋭化され、その一方で混同されるのは、恋愛においてであろう。「恋愛」という熟語は、恋と愛との共通性と同時に、一方が他方を包含・代替しえない相違性をも表現している。

確かに恋と愛とは時系列的連関性が認められ、そもそも恋している当人は、わが恋を愛だと思込みがちである。恋は熱情的に高ぶった“好き”であり、「あばたもえくぼ」的な冷静さを欠いた異様な高評価に翻弄されている状態である。「恋の病」と言われるほど身体にも影響し、一過性の狂気に近い。しかし愛には、はるかに尋常でない行動を起こしうるにもかかわらず、狂気性は附与されない。愛には、一過性の熱情ではない持続性が認められるためであろう。

「好きだけど愛していない」という表現が可能なのは、愛は感情間の序列において好意以上の強度であること、好きから愛へという段階的發展形が指定されていることを示している。その逆の愛から好きへという過程（愛する対象の高評価化）も可能であり、いずれにせよ愛が好きを包摂した状態である。

愛が好きより体験の幅が広いのは、その感情の持続性と内容にもとづく。まず好きであり続けることと愛し続けることの違いは、前者は対象への評価の継続性にすぎないが、後者はノエシス感情が深層で持続している。すなわち、前者はその持続は感情体験ではないが、後者はその持続自体が愛の感情体験である。

好きだった対象も、不快な体験をきっかけに、簡単に好きでなくなるように、好きの本質が対象への評価感情であるなら、それと本質を共有しない愛は、「対象への評価感情」ではないことになる。確かに愛は低評価をも受け容れる。

#### b) 幸福感

対象へのノエマ的な評価感情ではなく、自己の状態としてのノエシス的感情に「嬉しい・楽しい」がある。エクマンらは快適な表情は1種類しかないという（Ekman & Friesen, 1975）。彼らはそれを「幸福感」とし、嬉しい・楽しいという感情もこれに含めている。これらの感情は、願望充足・満足時において発現し、愛の実現結果に対する評価感情といえる。

では、愛において達成されたものは何か、愛における願望とは何か。これは愛の動機的側面の問題となる。『饗宴』では、自己に無いもの・美しいものという対象が示され、愛は外在的価値の獲得欲求とみなされている。愛が幸福感の先行条件で、幸福感は愛を前提とした後続感情だとすれば、幸福感は愛の変異ともいえ、その意味では愛の下位感情といってもよい（スピノザは愛を喜びの下位感情においているが）。ただ幸福感が愛と無関係に体験可能なら、類似感情となる。

#### c) 心配

幸福感が愛の達成ならば、愛において達成されていない状況も下位感情となる。愛の対象がなにがしか（それが何かはここでは問わない）の未達成状況にある時、特有の不満状態となる。この不満は、当然の権利が満たされない怒り的な不満とは異なり、状況の悪化・危機状態への共感的な、たとえば「身を案じる」というような不安としての不満である。この不満状態が「心配」である。

心配という語は、他者だけでなく自己に対しても使われることから、心配が前提としている愛は自己愛を含むことになる。また愛は、（スピノザの規定と異なり）喜びだけでなく心配をも併発するなら、単純に快感情に分類できない。愛は心を痛める「かな（愛）し」い感情でもあるから。

#### d) その他の下位感情

その他の下位感情として、恋愛や祖国愛のように、対象の違いによる列挙も可能である。確かに愛は対象に応じてその情としての現われ方が異なる。ただ対象性の相違として第一に問題にすべきなのは、対象愛と自己愛であろう。この問題はすでに3.2で述べたが、愛の本質規定にかかわるので、今後もさらに言及する。

### 4.2. 対立感情

対立感情と対比することは、その対立関係を成り立たせている共通の次元を明らかにすることであり、その対立軸から当該感情の意味が論理的に確定できる。その対立関係は、表層・深

層・存在論的という多層性をもっている（やはりここでも探求の既知性のパラドックスは免れない）。

a) 憎悪

“愛憎”という対立関係を構成する次元は何か。憎悪の直接の起源は怒りであり、怒りの深層化（対象の非現前での持続、前意識化）として憎悪が成立する（山根，2005）。すなわち、相手の行為に対する「原規範」的評価としての怒り（“許せない”という気持ち）が、たとえばその行為の高頻度化によって、その行為者自身に帰属された場合、その行為がされなくなっても、行為者が存在する限り、その“許せない気持ち”は持続される。それが憎悪である。

一方、表層感情の怒りそれ自体は深層感情の愛とは無関係であり、愛する相手を怒ることはなんら矛盾ではない（真剣に怒ることは愛の表現とさえなる）。

憎悪は怒りの準備状態（戸田，1992）などではなく、怒りが解消されずに持続しさらに深刻（深層）化する過程である。憎悪における許せない対象は、行為者の“存在”になる。存在を憎むことは存在の無化（殺意）へと導かれる。憎悪は“存在否定”の感情である。

ならばその対立感情としての愛には、“存在肯定”という性質が帰属される。愛は憎悪・殺意とは逆の、存在を承認し、存在し続けることを願う感情ということになる。

憎悪は存在の可否の次元での愛の対立感情であり、ベクトルは異なるが、存在への強い関心という次元上の性質は共通している。したがって憎悪は愛の「反対感情」（対立感情の下位の1つ）である。すなわち愛と憎悪は両立可能であり、愛は存在にかかわるゆえに憎悪に転換することが可能となる（裏切られた愛としての憎悪は、いまだ消えぬ愛を抱え持ったジレンマ的な憎悪であり、“恨み”と称せる）。

b) 無関心

対象存在の関心レベルでの対立感情ではなく、愛憎軸がもっている存在への関心自体での対立感情、すなわち愛と両立不可能の「矛盾感情」、愛の不在状態としての対立感情は、関心の不在、すなわち無関心である。ただし無関心は、特定の感情というより、対象への感情自体が存在しないことであり、その意味で感情一般（情）と対立している（憎悪よりも対立性が深い）。

感情としての存在肯定（感）は知覚的な存在認知を前提とする。対象知覚の実感である存在認知は、現象学でいう意識の「志向性」すなわち感情以前の認知段階での存在肯定（措定）に相当する。そして感情的な存在肯定である関心は、単に受動的な存在認知段階を越えて、能動的・積極的な志向の「超出」（山形，1993）、「想い」さらには「かかわり」という（行動化を含む）自己の投入である。それに対して無関心は、存在認知以上には志向性が強まらないこと、すなわちその存在に自己をかかわらせないことである。

愛の対立感情が無関心なら、愛は関心と同義になる。ただし関心は愛と無関心という両端を構成する1次元軸そのものを意味し、その軸の一方の端である愛とは関心の充実、いや関心の横溢状態こそふさわしい。相手をじっと見つめ、胸が締めつけられ、思わず駆け寄って抱きしめてしまうほどの関心、それは自己を忘れてしまうほどの対象への超出である。ならばいまだ愛に至らない通常の関心は、強度的に弱い愛に相当し、愛の萌芽状態ともいえる。

c) 孤独

関心の不在ではなく、関心となる対象（関係）の不在、あるいは関心の不到達もまた愛を不可能にする。超出したい対象が外的世界に存在せず、そして外部から愛の手が差し伸べられないなら、外部との感情的交渉を得られず、外部との交流が閉ざされる。その時の隔絶感が孤独である。

孤独は孤独感（さびしさ）という表層的な欠如・空虚感情と、愛と存在論的次元で対立する原感情（孤独感として自覚されない）とに分けられる。前者を「心理的孤独」、後者を「実存的孤独」と表現したい。

心理的孤独は、表層的で自覚できる孤独感であり、愛（愛着の対象）の不在状態である。関心の対象が不在になった喪失感を伴う点が無関心と異なる。愛情関係の不在としてみるなら、愛されることの不在（関心をもたれないこと）と、愛する対象の不在（関心をもつものがないこと）とに分けられる。たとえば、集団的いじめにおける“無視”という行為は、いじめ対象への無関心を誇張的に表出することで、孤独という社会的に存在を無にする措置を意味する。ただし個別の対人関係に依存する心理的孤独は、それ以外の場面では愛は実現している。

一方、深層感情にして存在にかかわる感情である愛の対立概念としての孤独は、対人関係的感情ではない。ここでいう“実存”段階とは、哲学的抽象思考によってはじめて到達する抽象観念ではなく、“私が在る”という、存在を実感している段階であるため、確固とした自己意識の有無を問わず、幼児にも他の動物にも実感される。ただ彼らはその実感を表現するボキャブラリー（存在論的概念）をもたないだけである。たとえば虐待を受けた幼児は、「自分の存在を否定された」という感じを、言語化できないにしろ、抱くことは可能であり、後年になってそれが自己確認される。

その実存レベルの孤独とはいかなる現象か。愛の生物学的起源が、自己（遺伝子）の複製にあるのに対し、その対立概念である孤独の生物学的起源は別のところにある。生物であることの本質は自己の複製ではなく、“生きている”という生命現象であり、それは「動的平衡にある流れ」であるという（福岡, 2007）。そしてその動的平衡を可能にしているのは生命システムを外部の物理世界と境界づける“膜”である。生物とは膜に被われた存在者、被膜性によって外界から隔離された内界（外界とは異なる秩序）をもちえた存在者である。生命とは、膜内での内界の（負のエントロピーの）維持現象であり、それゆえ膜の破壊・外界との同化は死（無＝非存在）を意味する。この被膜存在、すなわち膜によって外界と区切られたこの“内在”性こそ、実存的な孤独のはるかなる根拠となる。生物としての“個体”が存在することは、孤独で在ることにほかならない。

ただし被膜存在としての生命は、外界との物質交換によって「動的平衡」が維持されており、孤独な存在者は外界を超越した神的存在になることもできない。あくまで外界＝世界の中のみ存在しうる“世界内存在”である。すなわち“私”とは世界・他に開かれた孤独である。人間個体レベルにおいては身体表面（大部分は表皮。消化器官の内壁を含む）が膜として機能している。

この内在性が表層的な寂しさと同じく“孤独”とされるのは（正確に言えば、表層の孤独感を根拠づける深層の孤独性）、外界への超越といういわば自己否定的志向を持ち続けているためである。

その次元の孤独とは、“私で在ること”そのものとしての孤独である。私は私でしかなく、私として存在（内在）しているがゆえの本来の孤独である。この孤独は存在論的隔絶性であり、世界内に在りながら世界と隔てられている“独房性”を意味する。

この孤独が開示するのは、愛という超越の達成不可能性である。しかしそれは愛という超越の発生不可能性ではない。むしろ孤独ゆえに愛を志向し（愛の不可避性）、愛するがゆえに更に孤独を痛感する。孤独は愛の原因であり、結果でもあるのか。文学者福永武彦（1975）の言うように、愛は孤独を豊かにすることしかできないのかもしれない。



この本来的孤独から逃れることができる唯一の方法は、被膜の消失である。それは日常心理的には「大洋感情」に代表される幻想的な自己拡大感に相当しよう。自己の他（対象）への横溢、自己がこの小さな身体（被膜）を越えた状態。それは世界との合一・同化体験である。しかし被膜が孤独な実存を保障しているとしたら、その消失は死を意味するのではないのか。孤独（生）の否定としての愛は死を志向することにならないのか。愛のアポリア的性質が垣間見えた。

## 5. 心理的距離現象としての愛

愛とは、対象の存在を肯定し、自己との（心理的・実存的）膜を乗り越えて関心というベクトルを横溢させることなら、そして孤我の解消としての合一がその目的なら、愛の実現過程は対象との心理的距離の接近現象とみなすことができる。心理的距離という体験的距離感の現象学的構造は、個別性と共同性の2次元からなる（山根，2005）。それに基づけば、心理的距離の接近体験としての愛は、個別性の強大化と共同性の増大という2次元現象として記述できる。

### 5.1. 愛の2次元性

愛を心理的距離体験として記述するなら、個別性は愛のノエマ的側面を意味する。個別性の強大化とは、対象のノエマ的強度の増大、すなわち対象の現われ・存在感の増大である。愛の対象性について、たとえば「対象の比類なき存在感」とした杉谷の論はこのノエマ面に着目した表現である（言い換えればノエシス面への言及が足りない）。

心理的距離における共同性の次元は、愛のノエシス的側面に対応する。それは対象の対象性に付随しない、受け容れやすさ・抵抗の無さ・一体感などの近さの感覚である。その近さは、対象の存在感の強さ（対象性）ではなく、自己と対象との存在の近さである。近いほど自己と一体となる度合が高いともいえ、孤独が解消される方向である。対象性に依存しないことで自己拡大感の体験ともいえる。

### 5.2. かけがえのなさ

ノエマとノエシスとを合成した志向性の1次元、いわば心理的距離そのものの1次元が愛の次元に相当するなら、愛とは個別性の強大化と共同性の増大が合わさった体験ということになる。

それは「かけがえのない」（国語としての「掛け替え」ではなく、あえて「欠け替え」と宛て字する）という感じであろう。すなわち共同性に満ちて自己から「欠く」こともできず、個別性に満ちて別の対象と「替える」こともできない状態。その対象なくしては生きていけないという状態。この心理的距離の2次元が合成された1次元の近さが愛の強さに相当するなら、愛の強さとは「かけがえのなさの程度」（愛は一定以上のかけがえのなさ状態）と定義できる。

それは、対象の対自（自己関係）的評価として、対象性と自己化という一見背反する原理がともに増強している状態である。対象は他性（非自己性）を強めながら、自己に接近する過程である。「かけがえのなさ」という心理的距離の極端な接近は、自他融合だけでなく他者の自己化をも含んでおり、孤独の解消への期待であると同時に、内在性の危機を意味する。愛は単純な心的同一化ではない。なぜなら個別性が強大であるため、自他の区別がより鮮明になってしまうから。ともに被膜存在である自他にとっての愛は、他が自己に同一化するか、自己が他に同一化するかの背反するベクトルを並存させる。ここにおいても、愛の構造的アポリア性が

示された。

愛はこのように心理的距離で説明できるが、それは愛の属性の1つにすぎない。たとえば距離を接近しようとする動機としての愛は心理的距離モデルでは説明できない。

### 5.3. 恐怖

心理的距離の考察にいたって、愛には先に言及されなかったもう一つの対立感情に気づかされる。恐怖である。恐怖についてはすでに考察を終えているので(山根, 2006), その説明は省略するが、恐怖における他性の顕現が、共同性とは正反対の、他性から逃れる方向へと主体を駆り立てる。

他(なるもの)への評価感情は、そのベクトルから、恐怖(遠ざかる)と愛(接近する)に二分できる(ポウルピの「愛着行動」はこの接近にほかならない)。生物が、他に接近することが愛、遠ざかることが恐怖の起源ともいえ、すなわち恐怖と愛はともに“他”への根源的感情といえる。

では愛と恐怖との分岐点は何なのか。まず恐怖はその現われ方で一瞬に発動するが、愛は自己との一定の相互作用を要する。すなわち“他”との出会いにおいては、まず恐怖を解除される現われ方かどうか重要であり、恐怖が発動しないですめば、その後愛ははぐくまれうる。

恐怖が「他の圧倒」ならば、愛もまた「対象の比類なさ」であり、“他”の存在感の強さではともにひけをとらない。ただし恐怖となる対象は違和感に満ちており、共同性が0に近い。それゆえ対象は自己化されえず、むしろ自己の“他”への呑み込まれ、自己の他化(自己の無化)が恐怖を伴わせる。すると恐怖が可能となるのは自己の存在への愛おしみが前提となり、恐怖は自己愛(ただし非コフォートの意味)にもとづくことになる。死(無)の恐怖は自己愛に由来する。

### 5.4. 受動的愛

愛が心理的距離の側面をもつなら、心理的距離体験のように、愛はコミュニケーションとして能動的体験と受動的体験をもつことになる。すなわち愛は相互関係において実現することになる。

われわれは自己の愛どころか自己の存在に気づく以前に、他者から愛されてきた。そもそも「他者」とは、存在論的には単なる同種他個体という存在者のことではなく、私に関心の視線を送り、私を愛しうる存在(様態)のことである(山根, 2005)。私は他者によってのみ“愛される”体験をする。

その場合の愛される体験とは、親からの世話が典型であるように、存在することが容認され、優しさの放射を浴びることである。

E. エリクソンは自我同一性確立のための乳児段階での発達課題を「基本的信頼(basic trust)」の確立としたが(Erikson, 1959), この基本的信頼(自己を信頼に値するという感覚を含む)は、愛される体験によるものである。信頼とは、存在肯定の能動的様態(受動的な存在認知と異なり、非現前性におよぶ存在肯定)であり、愛の重要な属性の一つである。

そもそもコフォートの自己愛は、親の愛の自己への「取り入れ(introjection)」によるものであり、親との相互作用に基づく「基本的信頼」に由来する。それは親からの受動的愛という意味で自己が対象となった愛のことであり、被愛感情・被愛欲求とも強く関連している。このように自己の存在(私が在ること)を肯定する感情は、世界側から肯定される体験に根拠づけ

られている。

### 5.5. 子孫愛（心理的距離では説明できない愛）

既存の心理的距離モデルで説明できない愛情関係に、生まれたばかりの子・孫に対する愛情がある。親はどのような過程で子（祖父母は孫）を愛するに至るのか。この心理過程はあまりに普遍的すぎるためか、まともに探求されていない（愛情の発生という心理過程が問題であるから、非心理学的概念の「利己的遺伝子」は使えない）。

相手はまだ愛着行動を示さない新生児であるため、通常の相互的コミュニケーションは不可能であり、成人側は受動的距離が体験できない。つまり通常の心理的距離が接近するという過程を経ないで成立する愛情なのである。ただ少なくとも「私はこの幼い命を愛するものである」という（社会規範的な）思い込みもかかっていることは確かであろう。

愛校心やチーム愛などの所属愛も、所属感以外には、好きという肯定的評価も、時間をかけた心理的距離の接近過程も必須ではない。愛という感情は、感情の内的成熟や相互関係の歴史は必須ではなく、認知や意思などの非感情的要素によって容易に喚起できるものなのだろうか。

## 6. 愛の現象学的探求

コフォートによって愛＝対象愛という先入観から自由になったわれわれは、自己愛と対象愛に共通する、すなわち愛の対象となる存在者レベルの差異ではない、愛の本質部分に着目することができる。それは愛のノエマ（個別性）成分ではなく、ノエシス（共同性）成分（コフォートが属する精神分析において「リビドー備給」と言われている部分）に注目することである。

### 6.1. 志向作用としての愛

愛のノエシス（志向作用）成分は、まずは「関心」である。それは単なる受動的認知作用ではなく、「思い・かかわり」と表現できる能動的超出作用である。感情的志向作用といってもよい。ではその超出作用とは何か。それは心理的には心理的距離の能動的接近であるが、現象学的には対象を志向すること自体をいう（山形、1993）。

認知的超出は、凝視や手を伸ばしての接触行動などとして実現される。感情的超出、すなわち愛の超出は、かかわりという能動的共感・共振状態であり、内在でありながら“超出として在る”ことである。

そして実在的な意味での最終的な超出は、自己の被膜の突き破りであり、世俗的な意味での自己超越（自分の命を省みない）を意味する。愛という感情のノエシス面は、自己忘却的な超出であり、愛の超出は自己が世界へと立ち向かう行動として実現する。ある感情は特定の行動の“動因”となるように、愛も特定の行動の動因となる。その行動は“優しさ”（憎悪にもとづく攻撃の反対）という性質をもった行動である。優しさとは、対象が何であれ、その存在のいたわりである。すなわち優しさの対象は存在者の存在であり、存在へかかわることである。

### 6.2. 存在愛

愛するとは自己側の能動的超出、愛されるとは外界からの受動的超出を意味する。だが能動と受動的の表面的な対立は、受動的愛の根源性によって止揚された。受動的愛（自己愛）と能動的愛（対象愛）の分離・対立が表面的なものであるとすれば、その次元を越えた愛の本質は何か。

自己と対象との隔絶性を前提する必要がなくなり、孤独を愛の起源にする必要がなくなった今、問うべきなのは、孤独なわれわれが何（どの存在者）を愛しているかではなく、愛は何を愛しているかである。

愛は好意と違って存在者の特定の属性ではなく、存在者の存在を対象としている。愛の対象から存在者を除外すると、愛の真の対象である“存在”（在ること）が残る。愛はただ“在ること”を愛する（肯定する、いたわる）。

それは通俗的に言われているように、ある対象が“今のまま在る”ことを承認しているだけではない。愛は“存在すること”の信頼・喜び・幸福感であり、それへ責任を負う（心配・世話する）ことですらある。存在を愛するとは、存在し続けることを愛することである。それゆえコフートのでない本来の自己愛とは、自己がただ在ろうとし続けていること（生命現象）にすぎない。

愛とは、私が・あなたが“在ること”そのものの感情であり、同一化への志向は愛の本質ではなく、孤独に由来する（少なくとも愛にとっては）二次的なものである。

だから、われわれは存在者の存在状態に限定されることなく、他者もモノも故郷も国も地球も真理も美も、そして自己も愛することができるし、さらには道端の小動物や植物にも（心理的距離の接近などを経ず）優しくすることができる。

### 6.3. 愛のアポリア

最後にこれまで指摘してきた愛のアポリア性、すなわち、愛の対象性と自己化（心理的距離の無化）、内在性と超越性という背反するベクトルについて言及したい。このアポリアは孤独に動機づけられた愛に内在するものである。孤独の解消としての被膜性の否定という動機は、死によってしか解決しえない。現実には、自己の命を賭して愛を全うする話にわれわれは感動し、それこそ究極の愛だと評価する。だから、愛を同一化の欲求と混同し、精神分析でいう口愛期的な「取り込み・体内化」(incorporation)を愛と思ひ込み、あるいは自己を生贄に求める愛に殉教する。愛は自己が死ぬか他を殺すかという自他の存在の択一性に至らざるをえないのか。

現象学者のE. レヴィナスは、愛のあるべき姿を自他の合一におかない。『暴力と聖性』(Poitité, 1987)においてレヴィナスにとっての愛は次のように集約されている。「統一を望む愛は、苦痛に変質する。他なるものと一つになろうとする望み、彼が一人いる閉じられた場所にはいろいろと望みながら、私の身体は彼の身体とぶつかり、私の孤独は彼の孤独にぶつかってしまう」「愛は自我の外への逃走でも、他者を把持する能力でもない。それは迎え容れることであり、贈与することである。だから『ここへいらっしゃい』という言葉がおそらく至上の愛の言葉なのだ。その情念の炸裂するような告白なのだ」。

自己と対象との一体化を欲する動機は存在愛それ自体の本質ではない。自己と対象とが（何ものにも動機づけられていない穏やかな）存在愛に包まれているなら、“共に在ること”こそが求められるはずである。愛は「好き」や「かけがえのなさ」の先にある高尚で覚悟のいる“究極感情”ではなく、「関心」とともに自然に起こる、ありきたりな“情”なのではないか。

## 7. 文献

Bowlby, J., 1969 *Attachment and Loss, Vol. 1 Attachment*. The Tavistock Institute of Human Relations (J. ボウルビィ 黒田実郎他訳 1991 『母子関係の理論 I 愛着行動』 岩崎学術出版社)

- Dawkins, R., 1989 *The Selfish Gene*. Oxford University Press (R. ドーキンス 日高敏隆他訳 1991 『利己的な遺伝子』 紀伊国屋書店)
- Descartes, R., 1649 *Passions del'ame*. (R. デカルト 野田又夫訳 2002 『省察・情念論』 中央公論社)
- de Spinoza, B., 1677 *Ethica - Ordine Geometrico Demonstrata*. (B. スピノザ 畠中尚志訳 1951 『エチカ』 岩波書店)
- Ekmann, P., & Friesen, W. V., 1975 *Unmasking the Face*. Prentice-Hall, Inc., Englewood Cliffs, New Jersey (P. エクマン & W. V. フリーゼン 工藤力訳編 1987 「表情分析入門—表情に隠された意味をさぐる」 誠信書房)
- S. フロイト 懸田克躬・高橋義孝他訳 1914 『ナルシズム入門』(『フロイト著作集』第五巻 1969 人文書院)
- 福永武彦 1975 『愛の試み』 新潮社
- 福岡伸一 2007 『生物と無生物のあいだ』 講談社
- Erikson, E. H., 1959 *Psychological Issues Identity and The Life Cycle*. International University Press, Inc. (E. エリクソン 小此木啓吾訳編 1973 『自我同一性—アイデンティティとライフサイクル』 誠信書房)
- Kohut, H., 1971 *The Analysis of The Self*. International Universities Press, New York (H. コフト 1994 水野信義・笠原嘉監訳 『自己の分析』 みすず書房)
- Kohut, H., M. D. 1984 *How Does Analysis Cure?* The University of Chicago Press, Chicago and London (H. コフト 本城秀次・笠原嘉監訳 1995 『自己の治癒』 みすず書房)
- 九鬼周造 1979 『情緒の系譜』 岩波書店 (『いきの構造』に所収)
- Ornstein, P. H., (eds) 1978 *The search of the self-Selected writings of Heinz Kohut: 1950-1978 Volume 1*. International Universities Press, New York (P. H. オーンスタイン編 伊藤洸監訳 『コフト入門—自己の探求』 1987 現代精神分析叢書第Ⅱ期第14巻 岩崎学術出版社)
- Poitié, F., 1987 *Emanuel Lévinas, Qui êtes-vous?* La Manufacture, Paris (Fボワリエ 内田樹訳 1991『暴力と聖性—レヴィナスは語る』 国文社)
- プラトン 久保 勉訳 1965 『饗宴』 岩波書店
- 杉谷葉坊 1998 『情動論の試み—主体と世界のポリフォニー』 人文書院
- 戸田正直 1992 『感情—人を動かしている適応プログラム』 東京大学出版会
- 和田秀樹 1999 『自己愛の構造—「他者」を失った若者たち』 講談社
- 山形頼洋 1993 『感情の自然—内面性と外在性についての感情の現象学』 法政大学出版会
- 山根一郎 2005 『私とあなたの心理的距離—その社会心理学から存在論へ』 青山社
- 山根一郎 2006 「怒りの現象学的心理学」 椋山女学園大学文化情報学部紀要 5 71-84
- 山根一郎 2007 「恐怖の現象学的心理学」 椋山女学園大学人間関係学研究 5 113-12916